

ウンとゴマカシの放射能汚染土再利用を許さない 原発は危険で高コスト「旧世紀の技術」

4月26日、福島県農民連は政府と東電に対し、原発事故被害に関する申し入れを行い、福島県内から130名を越える参加者が参議院会館での交渉に臨んだ。

政府は原発事故以降、放射能除染により発生した汚染土壌を中間貯蔵施設で管理し、三〇年後には福島県外の最終処分地で処理することを約束してきた。

しかし環境省は、原発事故発生時から汚染土壌の再利用を水面下で検討してきた。そして実証試験と称して南相馬市、二本松市、飯館村で再生利用を進めようとしていることが判明した。二本松市では昨年十二月に市議会でも事業実施（公道のアスファルトの下の路床材に使用）の報告がされ、大問題になっている。

放射能汚染土壌を公道に再利用、最終処分地へ

朝六時過ぎに福島を出発した参加者は、首相官邸前で「福島切捨てを許さない怒りの行動」で原発事故による苦しみや怒りを爆発させた。安倍政権は国会運営において、文書改ざん、隠蔽、セクハラなど、自浄作用を示すこともできない状態である。シュプレヒコールでは「すべての原発いまずく廃炉！原発続ける政府はいらない」と氣勢を上げた。

福島を切り捨てる安倍政権を許さない。



農民連 汚染土再利用事業の事業額はいくらか。どのようにして二本松が選定されたのか。

環境省 全ての自治体から募集したわけではなく、「お付き合いのある自治体」に声を掛けさせていただいた。事業額は二〇〇mで三・五億円である。（通常の道路設置の場合二六〇万円で済む）

農民連 二本松市内で汚染土の仮置き場は二五〇箇所、フレコンで四〇万袋もあり、大変な思いで場所を確保してきた。前の市長も、市も汚染土は全て中間貯蔵施設に持って行くと説明し、仮置き場を借りている。国は明確に約束を破っている。

農民連 地元住民の「総意」があったというが、二一世帯中九戸のみの参加で、何も質問がなかったから総意を得たというのはいくらに強引ではないか。地域住民を国が分断し、総意を得たと自作し、生活道路に八〇〇〇ベクレルの汚染土を敷き詰め、最終処分地にする姿勢が許せない。環境省に良心の呵責はないのか！今からでも立ち止まり、計画を見直せ！

環境省 路床材に使用した場合、最終処分地ではなく、「再生利用地」と言います。再生利用する場合どこにも使用するわけでなく、上部に道路など適切に利用し管理できるところだけを想定しています。安全性を確保し、モニタリングを続け皆様にお知らせ続けていきます。

環境省は自らの約束を反故にし、汚染土の再生利用を強引に進めようとしています。これを許せば、福島県内だけでなく、全国で放射能汚染土利用が進み、放射性物質を拡散することになってしまいます。



図1 現行賠償方法での支払額 単位(万円)

中区分品目	品目	7月	8月	9月	合計
園	桜桃類	桜桃	-5		-5
	もも類	もも	-15	-5	-20
芸	ぶどう類	巨峰	+5	+5	10
現行支払額					25

新賠償方法での支払額 単位(万円)

中区分品目	品目	7月	8月	9月	合計
園	桜桃類	桜桃	-5		-5
	もも類	もも	-15	-5	-20
芸	ぶどう類	巨峰	+5	+5	10
現行支払額					15

図1 マイナス分の合計額を賠償
事故前に比べプラス部分は含めない

売上が事故前に比べプラスになった分を賠償額から差引「損益通算」

東京電力は平成三一年一月から農業賠償方式の変更を検討しているが、内容は賠償金額を減らす姑息な方法を検討しています。これまでの原発事故前の販売額を下回れば賠償金が支払われ、上回れば当然賠償はありません。これからは図1のように他の作物と差引「損益通算」して賠償金額を減らすことを検討しています。

原発事故以降、農家は漫然と賠償金を受けてきたわけではなく、新しい技術や新品種、販売先の開拓など賠償に頼らないで経営を成り立たせようと努力しました。来年からの新賠償案は、農家の努力を無視して、本来あるべき被害を打ち消し、見えなくしてしまいます。また、東電は売上の基準年の変更も検討しており、十二年も前の資料提出も検討しており非現実的で到底認められません。東電は被害のあるかぎり賠償を行うと明言しており、今回の新賠償の損益通算は許されません。

損害賠償を姑息に変更「損益通算」

農民連フラッシュ① たねを守ろう！

県農民連青年部は4月15日、二本松市・男女共生センターで第24回総会記念企画、映画「種子—みんなのもの？それとも企業の所有物？」上映会と日本の種子を守る会事務局アドバイザー印鑑智哉さんの講演会を開催。約90人が参加。種子法や遺伝子組み換え種子、アグロエコロジーなど世界の種子事情を詳しくお話いただきました。



農民連フラッシュ② 寝屋川れんげ班 福島視察ツアー

4月11日～13日、寝屋川支部のれんげ班から8名が福島視察ツアーに参加されました。今でも帰還困難区域の浪江町や避難が解除されたが帰還が進まない飯館村などを視察していただきました。



NOTE 若き農業者のつばやき

せいねんぶ農人

梨の花粉交配、りんごの摘花の作業を行なった。例年より開花が早く心の準備ができないまま作業に追われている。昨日まで真っ白だった梨の棚があつという間に花吹雪、新緑になった。次は摘果が待っている。秋には良い実になるように1つ1つ手をかける。あせらず、体も心も適度に休ませながら収穫まで作業は続いていく。by藤田

